

風と共に去りぬ

ミッチェル

大久保康雄 訳
竹内道之助

河出書房新社

1



風と共に去りぬ

I

マーガレットミッチェル

訳

大久保康雄
竹内道之助

河出書房新社

GONE WITH THE WIND

Copyright 1936 by The Macmillan Company

Copyright renewed 1964 by Stephens Mitchell and Trust Company of Georgia as Executors of Margaret Mitchell Marsh

Copyright renewed 1964 by Stephens Mitchell

All rights reserved

Protection under the Berne, Universal and Buenos Aires Conventions

Published under Licence from Mikasa Shobo, Tokyo,

Holder of the rights to print and publish in Japan.

ミッチェル 風と共に去りぬ 1

昭和50年7月25日初版発行

昭和50年12月15日7版発行

訳者——大久保康雄・竹内道之助

発行者——中島隆之

印刷者——草刈龍平

装幀者——広瀬 郁・宍田利孝

発行所——株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町3-6 電話東京292・3711大代表 振替口座東京10802

風と共に去りぬ I

目次

第一部

第一章……………三

第二章……………二七

第三章……………四九

第四章……………七五

第五章……………九一

第六章……………一二五

第七章……………一六二

第二部

第八章……………一七四

第九章……………一九九

第十章……………二四五

第十一章……………二六一

第十二章……………二七一

第十三章……………二九五

第十四章……………三二四

第十五章……………三三九

第十六章……………三四六

第三部

第十七章	三六	第十九章	四〇五
第十八章	三八七	第二十章	四二四

解 説	（大久保康雄）	四三七
-----	---------	-----

一 ミツチエル女史について	四三七
二 『風と共に去りぬ』が世に出るまで	四四〇
三 歴史小説としての『風と共に去りぬ』	四四二
四 この小説の背景としての南北戦争	四四四

風と共に去りぬ

I

主要人物

スカーレット・オハラ この小説の女主人公。南部の心臓部といわれるジョージア州アトランタに近いタラの大農園主オハラ家の長女。個性的な美貌と火のように激しい気性の持ち主。アシュレに失恋した腹いせにチャールズ・ハミルトンと結婚する。

ジェラルド・オハラ 広大な綿花畑と多くの黒人奴隷をもつアイルランド生まれの豪農。反骨と剛毅の性格の反面にやさしい心情の持ち主。

エレン ジェラルドの妻。フランス人を祖父母にもつ優雅な貴婦人。スカーレットの母。

スエレン スカーレットの妹。

キャリーン スカーレットの二番目の妹。

チャールズ・ハミルトン ハミルトン家の長男。スカーレットの第一の夫となる。

メラニー アシュレの妻。献身的で寛容なところの持ち主。チャールズの妹。

アシュレ・ウィルクス 樫の木屋敷とよばれる大農園をもつジョン・ウィルクス家の長男。貴族的南部の教養と文化を身につけた青年。スカーレットの情熱にひかれながら、南部の

伝統的社会にふさわしい従妹のメラニーと結婚する。

ハニー アシュレの妹。婚約同様のチャールズをスカーレットにうばわれる。

インディア アシュレの二番目の妹。

フランク・ケネディ スエレンの許婚者。

レット・バトラー 南軍の敗北を見ぬき、戦争をばかげた浪費だといって密輸入で巨利をしめる大胆不敵な風雲児。風のごとくスカーレットの前にあらわれて、彼独特のやり方で求愛をつづける。

ベル・ワットリング アトランタの夜の女。レットのなじみ。

ミード博士 アトランタの医師。熱烈な南部同盟支持者。

ピティパット チャールズやメラニーの叔母。老嬢。

マミー エレンが実家からつれてきた黒人の侍女。

リー將軍 ヴァージニア州出身の南軍の司令官。人格、戦略ともにすぐれた名將。

チャーマン將軍 アトランタ攻撃の北軍総指揮官。

第一 部

第一章

スカレット・オハラは美人ではなかったが、双子のタールトン兄弟がそうだったように、ひとたび彼女の魅力にとらえられてしまうと、そんなことに気のつくものは、ほとんどないくらいだった。その顔には、フランス系の「コースト（海岸）」貴族の出である母親のデリケートな目鼻だちと、アイルランド人である父親のあから顔の肉の厚い目鼻だちとが、めだちすぎるほど入りまじっていた。しかし、さきのとがった、角ばったあごなど、妙に人をひきつける顔である。目は、茶のすこしもまじらない淡碧^{うすあお}で、こわくて黒いまつ毛が、星のようにそのまわりをふちどり、それが目じりへきて心もちそりかえっている。その上に、黒くて濃い眉^{まゆ}が、ややつりあがりぎみに、マグノリアの花のような白い肌^{かわ}に、あざやかな斜線をひいていた。——この肌は、南部の女たちがひどく

大切に、ボンネットやヴェールやドレス手ぶくろなどで、あのジョージアの激しい日ざしから、じつに注意ぶかく守っているものなのである。

一八六一年四月のある輝かしい午後、父の大農園^{グランドファーマー}タラのポーチの涼しいかげに、タールトン家の双子兄弟スチュアートとブレントとともに腰をおろしている彼女のすがたは、一幅^{いっぶく}の絵のように美しかった。スカートのフープ^{フープ}（籐骨^{たがぼね}）の上に十二ヤードも波うっている緑の地に花模様の新しいモスリンのドレスは、最近父がアトランタから買ってきてくれた緑色のモロッコ皮の上靴^{かぶつ}に、よく調和していた。ドレスは、このかいわい三郡きつての細い腰、十七インチの腰の美しさを、くつきりと浮きたたせ、びっちりと身についたバスケット（上着）は、十六歳にしてはよく成熟した胸のふくらみを見せていた。しかし、内気そうにひろげたスカートも、シニヨン（まげ）に結ってネットをかけたしとやかな髪も、ひざの上につつましくかさねている小さな白い手も、彼女のほんとうの人柄はとうていかくしきれるものではなかった。気をつけてやさしく見せている顔のなかで、碧色^{あざい}の目だけは、あらあらしく強靱^{きやうじん}な意志と、あふれるような情熱とをあらわして、その上品な物腰とは、およそ似つかわしくないものがあつた。彼女の举措^{きさく}は、母のやさしい

しつくと、黒人の乳母^{うは}の、よりきびしい訓育とによって
しいられたものであった。だが、目だけは彼女自身のも
のであった。

彼女の両側には、ひざまでの長靴をはいた双子の兄弟
が、のんびりといすにもたれて、鞍^{くら}ぶとりのした長い両
足をむぞうさに組みかさね、笑ったり話したりしなが
ら、はっか水の高いコップごしにきらめく日の光に、目
を細めていた。ふたりとも年齢は十九歳、丈^はは六フィ
ート二インチ、骨組み高く、筋肉たくましく、日にやけた
顔、濃い赤褐色^{せうしよく}の髪、明るい傲慢^{ごうまん}な目、おなじ青い上
着、おなじからし色の乗馬ズボンにからだをつつんで、
この兄弟は、まるで二つの綿^{わた}のさやのようによく似てい
た。

戸外では、おそい午後の陽光が、ななめに前庭^{まへてい}に射
し、新緑を背景にして、まっ白な花のかたまりのような
ドッグウッド^(北米産花みずき)の茂みを、まばゆくうきださせ
ていた。兄弟の乗馬は、馬車道のほうにつないであつた
が、大きな馬で、主人の髪^{かみ}の毛とおなじ赤い毛なみをし
ていた。馬の足もとでは、兄弟の行くところへなら、ど
こへでもついてくる、やせて神経質な、インディアン犬
の一群が、しきりとけんかをしていた。すこし離れたと
ころには、口輪をはめ、いかにも貴族然とした顔つきの

黒ぶちの馬車犬が一匹、主人たちが晩の食事にかえるの
を、辛抱よく待っていた。

これらの犬と馬と兄弟との間には、いつもいっしょに
いるという以上の深いつながりがあった。いづれも、健
康で、思慮のない若い動物たちで、育ちがよくて、優美
で、癩^{かんべき}癬^{びん}がつよく、青年たちは彼らの乗馬とおなじよう
に、血気さかんで、かんしゃくもちで危険ではあるが、
うまくあやつってくれる人にたいしては、すこぶるやさ
しい感情をもっていた。

安楽な大農園主<sup>(ブランドー・ジョンは、奴隷制労働による南部独
特の大農園で、作物は棉花とコーヒールにかきら
れた)</sup>の生活のなかに生まれ、幼時から、なに不自由なく
育てられてきたのだが、このボーチにならんだ三つの顔
には、けっして無気力な弱々しいものはなかった。一生
を、ひろびろとした外気のなかですごし、読書などとい
う退屈なことには、あまり頭をなやましたことのない、
自然人の、はちぎれるような鋭気と精悍^{せいへん}さをもってい
た。ジョージア州の北部にある、ここクレイトン郡の生
活は、まだ新しく、すでに根のはえた、オーガスタやサ
ヴァナやチャールストンなどにくらべると、ずっと野性
的であった。だから、南部でも、もっとおちついた、古
くからひらけている地方の人々は、奥地のジョージア人
たちをさげすんでいたが、北部ジョージアのこのあたり

では、昔ふうの典雅な教養が欠けていても、日常生活に必要なことさえうまく処理していければ、いっこう恥ではなかった。よい綿花をつくること、乗馬が巧みなこと、射撃がじょうずなこと、軽やかに踊ること、やさしく婦人に奉仕し、一人前に酒がのめて酒席の相手がつまること、彼らに必要なのは、これだけだった。

ふたりとも、こんな方面の才能にかけては、なかなかすぐれていた。書物にふくまれていた内容から何かを学びとる才能に欠けている点においても、おなじように彼らは有名だった。彼らの家はこの郡内でも肩をならべるものはないほど財力があり、馬や奴隷も一ばん数多くもっていたが、このむすこたちは、こと学問に関しては、近所に住んでいる貧乏白人の大部分よりも、劣っていた。

スチュアートとブレントが、この四月の午後、タラ屋敷のポーチでらくらしている理由も、まさしくここにあった。その日もちょうど彼らは、ジョージア大学から——この二年間に彼らを退学させた四番目の大学から、放校されてきたばかりなのである。彼らの兄のトムとボイドも、弟たちを歓迎しないような学校には、いてやらないというので、みないっしょに帰ってきてしまった。スチュアートもブレントも、こんどの放校処分を非常に

おもしろがっていた。またスカレットも、去年フェイアットヴィル女学校を卒業してிரை、これも自分からは一冊の書物もひもといたことがないほどだから、彼らと同様に、これをおもしろがっていた。

「あなたたちふたりやトムは、放校なんて、なんとも思ってたやしないでしょうけど」と彼女はいった。「でも、ボイドはどうかしら。あの人は、きちんと学校をやりがっているんでしょう。それなのに、あなたたちふたりして、ヴァージニア大学、アラバマ大学、南カロライナ大学、そしてこんどはジョージア大学と、どこもみんなやめさせてしまつて、こんなふうだと、いつになってもあの人、卒業できないことよ」

「なあに、あいつは、フェイアットヴィルのパーマリー判事さんの事務所で、法律の勉強をするからいいんだよ。こんなことは、たいして問題ではないんだ。それに、こんどのがなくなつたつて、どっちみちぼくたちは学期が終わらないうちに帰つてこなければならなかつたんだからね」と、ブレントが、こともなげにいい放つた。

「あら、どうして？」

「戦争だよ、ばかだなあ！　いつ戦争がおつぱじまるかわからないんだよ。きみは、戦争がはじまるというの

に、ぼくらが学校にじっとしていられると思うのかい」

「戦争なんてありはしないわよ」とスカーレットは、そんな話題はもううんざりといった調子でいった。「ただうわさだけよ。なぜって、先週、アシュレ・ウィルクスさん父子^{おやこ}がきて、うちの父に話してたわ、ワシントンに派遣された南部の委員たちが、南部諸州同盟のことについて、リンカーン大統領と、友好——なんていったかしら、そうそう、友好協定よ、その友好協定ってものを、まとめたって。どっちにしてもヤンキー（北部人）は、戦争する気がないほど南部をこわがっているのよ。だから戦争なんてありはしないわ。あたし、もう戦争の話なんかあきあきしちゃった」

「戦争がないって？」双子は、自分たちがだまされたかのように、いきりたって叫んだ。

「もちろん戦争になるよ。そりゃヤンキーはわれわれを恐れているかもしれない。しかし、とにかく一昨日、ポール・ガール將軍が、サムター要塞^{要塞}を攻撃して、やつらを追いはらってしまったんだ！ こうなった以上は、やつらにしても、戦争せざるをえないさ。さもないければ彼らは、世界じゅうに臆病者の名をさらすことになるもの。」

南部同盟は——」

と、スチュアートがいうと、スカーレットは、もうが

まんができないというように、口をとがらせた。

「もう一度戦争という言葉を口にしたら、あたし、家のなかにはいつてドアをしめちゃうことよ。生まれてからこのかた『戦争』という言葉ほど、あたしをあきあきさせたものはないわ。それとも『南北分離』というなら話は別だけど——。うちの父ときたら、朝も昼も晩も戦争の話、それからたずねてくる人が、またきまってサムター要塞だの、州権主義だの、リンカーンだのと、そんな話ばかり。まったくあたし悲鳴をあげたくなるわ。しかも、若い人たちまでが、やっぱりそれで、やれ戦争とか、これから編成される騎兵隊のこととか、そんな話ばかりなんですもの。今年の春のパーティが、ちっともおもしろくなかったのは、男の人たちが、戦争のこと以外、話題がなかったからよ。このジョージア州が、去年のクリスマスがすむまで北部から分離するのを延期してくれたので、どんなにありがたかったかしれないわ。だってさもないと、せっかくのクリスマスのパーティが、めっちゃくちゃになってしまったにちがいないんですもの。あんなたち、もう一度戦争といったら、あたし、ほんとに家へはいってしまつてよ」

彼女はほんとに家の中にはいるつもりだった。彼女は、自分を中心になれない話題には、ながく辛抱するこ

とができなかった。だが、彼女は、そんなことをいうときにも、意識的にえくぼをふかめ、黒いまつ毛を蝶の羽のようにかるやかにまたき、ほほえんで見せるのを忘れなかった。だから青年たちは、彼女の予期したとおりに魅惑され、あわてて彼女を退屈させたことをあやまるのであった。戦争に興味をもていないからといって、彼らがスカーレットを思うことに変わりはない。かえって彼女への思いを深めた。戦争は男の仕事で、淑女のかかわり知るべきことではない。だから彼らは、彼女の態度を、かえって女らしさを示すものだと考えるのである。

退屈な戦争の話をやめさせた彼女は、こんどは、おもしろそうに、話題を当面のことにもどした。

「お母さまは、あんたたちふたりが、また放校になったのを、なんとおっしゃって？」

ふたりは、ぐあいのわるそうな顔をした。三か月前、ヴァージニア大学を希望退学して帰ってきたときの母親の態度を思いだしたからである。

「それがね」とスチュアートがいった。「母はまだぼくたちに叱言をいう機会がないんだよ。トムとぼくたちふたりは、けさ、母がまだ起きないうちに家を出て、トムはフォントイン家へ行ってひっくり返って寝ているし、

ぼくたちはここへきちゃったから……」

「だって、昨夜あんたがたが帰ってきたとき、なにもおっしゃらなかったの？」

「ところが、昨夜は、とても運がよかったんだ。ぼくらのかえるちょっと前に、母が先月ケンタッキーへ注文した種馬が、ちょうど運ばれてきてね、大騒ぎの最中さ。大きくて、——とてもすごい馬だぜ、スカーレット。きみのお父さんにも、すぐ見にくるようないといよ——。なにしろここへつれてくる途中、付き添いの馬丁を一噛みやらかすし、ジョーンズボロの駅まで引き取りに行つたうちの黒奴をふたりも踏んづけちまつたんだからね。おまけに、ぼくたちが帰るちょっと前には、厩舎を暴れまわって、母さんのもとの種馬のストロベリーのやつを半殺しにしてしまったんだ。ぼくらが帰ってみると、母さんは砂糖ぶくろをもつて厩舎の中にはいて、その荒馬をなだめにかかつていたのだけれど、うちの母さんは、まったく馬のあやし方はうまいね。黒奴たちは、こわがって、たるきにぶらさがったまま、目ばかり光らせているのに、母さんが、まるで人間にでも話しかけるように話しかけると、馬のやつ、おとなしく母さんの手から砂糖をなめはじめんだからね。馬にかけては、うちの母さんは、まったく第一人者だよ。やがて、

母さんは、ぼくらの姿を見ると、『いったい、なんだって帰ってきたんだい、四人もそろって——。エジプトの疫病（びやく）よりも始末のわるい人たちだよ、ほんとに……』とやりはじめたんだ。すると、いいぐあいに、そのとき、馬のやつめ、急に鼻あらしを吹いて、あと足で立ち上がりかけたもんだから、『出て行っておくれ。この大きなかわいのが気が立っているのがわからないのかい。おまえたちのことは、万事明日の朝だ』ということになっちまったんだ。だから、ぼくたちは、そのまま寝ちまって、今朝は、母さんにつかまらぬうちに逃げてきたってわけさ。あとのとりなし役にボイドをのこしてね」

「ボイドはお母さんに打たれはしないかしら」というのは、彼女もまた、郡内の人々とおなじように、小柄なタールトン夫人が、成人したむすこたちをつかまえて容赦（せうしや）なく折檻（せうかん）するということについて、無関心ではありえなかったからである。打ったほうがよいと考えた場合には、彼女は鞭（むち）で背中を打つことさえあったのだ。

ビアトリス・タールトンは、まったくそがしい婦人だった。大きな綿花畑と、百人の黒人と、八人の子どもを管理するばかりでなく、ジョージア州最大の種馬場まで経営していた。すぐ興奮する性質で、それに四人のむすこには、ずいぶん手をやいているので、馬や奴隷を打

つことは、だれにも許さなかったが、むすこたちをときどき折檻（せうかん）することは、べつに害もあるまいと考えていた。

「むろん母さんだってボイドなら打ちはしないよ。あれは長男だし、それに兄弟じゅうで一ばんチビだから、母さんだって遠慮するんだ」と六フィート二インチの身長を誇るスチュアートがいった。「だから、ぼくたちは弁解係に彼を残してきたんだよ。だいたい母さんは、もうぼくたちを打つのはよすべきだね。ぼくたちだってもう十九なんだし、トムなんか二十一にもなっているのに、母さんたら、まるで五つか六つの子どももみたいに扱うんだからね」

「お母さんは、明日のウィルクス家の野外園遊会（パードキヤン）には、その新しくきた馬に乗っていらっしゃるの？」

「母さんは、乗って行きたいらしいんだけど、父さんが、まだあぶないからといってとめているんだ。それに姉妹たちも不賛成なんだ。せめて一度くらいは貴婦人らしく馬車に乗って行かせたいといっているんだよ」

「明日、降らないといいわね」とスカールレットはいった。「この一週間、毎日降っていたんですもの。野外園遊会が家のなかのパーティになってしまふほどつまらないものはないわ」

「なあに、明日は晴れるよ、そして六月みたいに暑くなるよ」とスチュアートがいった。「あの夕焼けを見てごらん。あんなに赤いの、ぼくは見たことがないよ。夕焼けでお天気がわかるんだよ」

彼らは、スカーレットの父ジェラルド・オハラが新しく開墾した、はてもなくつづく綿花耕地を越えたかなたの、真紅にいろどられている地平線をながめた。太陽は、いま真紅にたゆとう雲のなかを、フリント川の向こうの丘のかげに沈みつつあった。四月の日の暖かさは、かすかな、おだやかな冷気のうちに消えていった。

その年は、あたたかいいききとした雨をとまなつて、春が早くきた。あかい桃の花は急に咲きだすし、ドッグウッドの花は、暗い沼地や遠い山々を、点々と白い星のようにいろどった。耕地の耕作はあらかたすんで、血のように赤い夕日が、新しくすきかえされたジョージアの赤土のあぜをいつそうあかく照らしていた。綿花の種子まきを待ちのぞんでいる湿潤な飢えきっている畑地の、あぜの一ばん上の砂の多いところは淡紅色に、また畦溝にそって影のおちている側面は、朱や深紅色やえび茶にそまっていた。白れんがの屋敷は、荒れくるう真紅の海にうかんでいる島のように見えた。その海は、旋回し、まがりくねり、あるいは彎月状をなして押しよせて

くる波濤の淡紅色の波がしらが、まさにくずれようとするたとんに化石したかのようであった。というのには、このあたりには、中部ジョージア地方のような黄色い粘土の平らな土地や、海岸地方の豊饒な黒土の大農園に見られるような、一直線の長いあぜというものがなければ、傾斜と起伏の多いここ北ジョージアの山麓地方では、豊饒な土壤が川底に流れこむを防ぐために、曲がりくねったあぜを無数にすきおこしていたのである。

野蠻なほど土の赤い土地であった。雨あがりには血のようになり、ひでりにはれんがの灰のようになった。しかしそれは世界で最適の綿花栽培地であった。白い家、たがやされた平和な畑地、ゆるやかに流れる黄色くにごった川など、気持ちのよい土地であったが、一方、明るい太陽の輝きと深い影との、対照のはげしい土地でもあった。きれいに開墾された農園、そして何マイルとなくつづいている綿花畑は、ゆったりと満足して、暖かい陽光にはほえみかけていた。その野の果ては原始林にいつづいていた。そこは、まっ昼間でも暗く、冷たく、気味わるく、いくらか不吉でさえもあった。そして松風の音は、「気をつけろ！ 気をつけろ！ おまえはかつてはおれたちのものだった。またいつかは、もとのようにしてやるぞ」と静かなため息とともに大地をおびやかした

がら、その時のくるのを何年も辛抱、よく待っているかに思われた。

ポーチにいる三人の耳に、ひづめの音や、馬具の鎖のがちやがちやいう音や、黒人のかん高いのんきそうな笑い声などがきこえてきた。野良働きの連中や驛馬どもが農園から引きあげてきたのだ。家のなかからは、スカレットの母のエレン・オハラが、鍵入れのバスケットをもってきた黒奴の小さな娘を呼ぶ、やさしい声が流れてきた。やがて、かん高い子どもっぽい声が、「へえ、奥さま」と答え、つづいてエレンが裏の煙製所のほうへ歩いてゆく足音がきこえたのは、たぶん野良からもどった黒人たちに食事をわけあたえるためであろう。こちらの食堂からは、タラ屋敷の召使頭であるポークが、夕食の用事をしているらしく、皿や銀器のふれあう音がきこえてきた。

この最後の音で、双子は、もう帰る時刻だと気がついた。だが、母親と顔を合わせるのがいやだったのだ。いまにもスカレットが夕食によんでくれはせぬかと期待して、タラのポーチにぐずぐずしていた。

「ねえ、スカレット、明日のことなんだけど」とブレントがいった。「ぼくらは、この土地から離れていたのだ、園遊会のことと舞踏会のことと知らずにいたのだ

が、だからといって、明晩踊って悪いという理由はないだろう。明晩のダンス、まさか、まだ全部約束済みではないだろうね、どう？」

「ううん、約束済みよ。だって、あなたたちが帰ってくるなんてこと知らなかったんですもの。あなたたちを待っていて、そのおかげで壁の花になるなんて、いやですものね」

「きみが壁の花になる！」ふたりは騒々しく笑った。

「ねえ、きみ、ぼくには最初のワルツを、スチュアートには最後のワルツを、そして夕食はぼくたちといっしょにする約束してくれないか。またこの前の舞踏会のように、階段に腰かけて、ジンシーばあさんと呼んで、運命占いをしてもらおうじゃないか」

「いや、あたし、ジンシーばあさんの占い、大きらいよ。あなたたちだって知ってるじゃないの、あたしのことを、髪の毛のまっ黒い、そして黒い長い口ひげの紳士と結婚するなんていうんですもの。髪の毛の黒い紳士なんて、あたし、大きらいだわ」

「じゃ、きみ、赤毛が好きなんだね。そうなんだろう」とブレントが、わが意を得たりという笑い顔をした。「さあ、ワルツと夕食の約束をしてくれよ」

「きみが約束してくれば、ぼくたちだって、秘密のこ

とを話してあげるぜ」と、スチュアートがいった。

「どんなこと？」と、スカレットは、子どものように、さっそくその言葉にとびついた。

「スチュアート、それ、昨日アトランタで聞いたあれかい？ あれなら、だれにも話さないって約束だったじゃないか」

「うん、ピティおばさんからきいたあの話さ」

「え、どなた？」

「ほら、アシュレ・ウィルクスの親類で、アトランタに住んでいるミス・ピティバット・ハミルトンさ、知ってるだろう——チャールズ・ハミルトンやメラニー・ハミルトンの叔母さんさ」

「知ってるわ、妙なおばさん、あんな変ちくりんなおばさん、あたし見たこともないわ」

「まったくね。ぼくたちが昨日アトランタで汽車を待っていると、ちょうどあの人が馬車で通りかかったのさ。そこで馬をとめて、ぼくらとちょっと話したんだが、そのとき、明晩のウィルクス家の舞踏会で婚約の発表があるはずだともらしてくれたんだよ」

「ああ、そのことなら知っててよ」とスカレットは、つまらなそうにいった。「あのひとの甥の、あの頭のすこしたりないチャールズ・ハミルトンとハニー・ウィル

クスのことでしょう。チャールズのほうは、あんまり気がすんでいないらしいけど、あのふたりが、いつかは結婚するということは、何年も前からだれでも知っていることよ」

「ほんとうにきみはチャールズを低能だと思っているのかい」とブレントがいった。「だって、去年のクリスマスのはじめには、さかんにきみのまわりにへばりつかせていたじゃないか」

「へばりつくのは向こうの勝手よ」スカレットはちょっと肩をすくめてみせた。「まるで女みたいな男だと思わう」

「ところが、こんど発表されるといふのは、チャールズの婚約のことじゃないんだよ」とスチュアートは得意そうにいった。「アシュレとね、チャールズの妹のメラニーとの婚約のことなんだ」

スカレットは、顔色は変わらなかったが、くちびるは白くなっていった。——ちょうど、警告もなしに致命的な一撃をくらった人が、その衝撃をうけた瞬間には、しばらく何事が起こったかわからないとおなじだった。スチュアートをみつめているスカレットの顔が、あまり静かだったので、他人の心をよむことのできぬ彼は、当然、彼女はただおどろいて興味をひかれただけな

のだと解釈した。

「ビティおばさんがいうには、メラニーの健康が思わしくないもので、来年まで発表はしたくないのだが、戦争の話があまりやかましくなったので、いっそのこと早く結婚させたほうがいいだろうと両家のあいだで話がきまったのだそうだよ。それで明晩の食事のやすみのときに発表するのだそうだ。さあ、スカーレット、ぼくたちも秘密を話してあげたんだから、きみもぼくたちといっしょに食事をするとか約束したまえよ」

「もちろん、お約束するわ」とスカーレットは、機械的にいった。

「そして、ワルツを全部ね？」

「ええ、全部」

「すごいぞ！ きっと、ほかの連中が嫉^{あや}いて気持ちがいたいになるぜ」

「気持ちがいたいさせとけばいいさ」とブレントがいった。

「ぼくたち二人で始末してしまふよ。ね、スカーレット、朝の園遊会でも、ぼくたちといっしょの席についてくれないか」

「え、なあに？」

スチュアートが、もう一度おなじことをくりかえした。

「もちろんよ」

兄弟は、よろこびの、だがいくらかはおどろきの顔を見あわせた。ふたりとも彼女が自分たちに好意をもっているとうぬぼれてはいたが、いままで、こんなにたやすくその好意のしるしを得たことはなかったのだ。いつもは、ごきげんとりとり頼んでも、うんともいやともいわず、ふくれるとおもしろがって笑うし、おこるとつんと冷淡になるし、さんざん手こずらせるのが常だったのである。それなのに、いまは、——園遊会ときにはいっしょの席についてくれるというし、ワルツは全部（彼らは舞踏を全部ワルツにするつもりなのだ）彼らと踊ってくれるというし、食後の時間までいっしょにいてくれるというし、實際上、明日の全部を約束したようなものである。これでこそ大学を放校されてきただけのかいがあったというものである。

この成功に新しく熱情をかきたてられて、彼らはいっそう帰ろうとはせず、園遊会のこと、舞踏会のこと、アシユレ・ウィルクスのこと、メラニー・ハミルトンのことなどを話題に、たがいに相手をおさえてはしゃべり合い、アシユレたちをひやかしたり、笑ったり、夕食にょんでくれるようにと、おおっぴらに、スカーレットにはのめかしたりした。だが、しばらくすると彼らは、スカ